

被災地域へのケア

東日本大震災後の精神的支援から臨床宗教師育成の必要性を提起



実践宗教学寄附講座で発行しているニュースレター。vol.3まで発行されている。ホームページからも閲覧可能。



2013年3月4日、第2回臨床宗教師研修。受講者たちは、南三陸町戸倉海岸で海に向かって追悼の祈りを捧げた。

「実践宗教学寄附講座」では、「臨床宗教師」の育成のための研修が行われている。臨床宗教師とは、宗教的背景の異なる被災者に超宗派的ケアができる人材のことだ。主任の鈴木岩弓教授のほか、高橋原准教授と谷山洋三准教授が運営にあっている。

東日本大震災後、読経や慰霊といったみずからの特質を活かした「宗教的支援」を行う宗教者の存在が注目された。それまで日本の宗教者の多くは、限られた自己の信者に対し、自己の宗派・宗教の教えを語ることで、その仕事はほぼ完結していた。しかし、大震災後、被災地に支援に入った宗教者たちは、様々な宗派宗教の人々を支援する場面に遭遇することとなった。そこで浮上してきたのが、超宗派的に宗教的ケアができる人材を養成するシステムの開発であった。鈴木教授は「宗教について中立である国立大学だからこそ、この講座を開くことができた」と語る。東北大学が選ばれた理由としてはさらに、90年の歴史をもつ宗教の科学研究を進める宗教学講

座がすでにあっただ点、医学部もあるため医療の専門領域へ活動を広げられる可能性がある点なども挙げられる。

受講者は、講義、グループワーク、追悼巡礼、実習をとおり、「傾聴」「スピリチュアルケア」「宗教間対話」「宗教協力」の能力向上を図り、宗教団体以外の諸機関との連携方法や適切な宗教的ケアについても学んでいく。運営資金は寄附等で賄われており、2013年3月には全日本仏教会、6月には日本宗教連盟がこの講座の推薦、後援団体になることを決定。3年間の時限講座としてスタートしたが、さらに支援が増え、期限が切れる再来年度以降も講座が続くことを、関係者は切望している。

今後について鈴木教授は「超高齢多死時代を迎えるわが国において、死を前に救いを求めている人のいる全ての医療・介護施設に、臨床宗教師が常駐する社会になれば」と考えている。



被災地や医療施設でまず必要なのは、教え導くことではなく、相手の気持ちに寄り添って耳を傾けること。研修で身につけたスキルを使って、被災地で傾聴活動を行った。



宗教協力は、布教を目的とせず人々と接することから始まる。

実践宗教学寄附講座のスタッフ。左から谷山洋三准教授、佐藤千尋さん、鈴木岩弓教授、高橋原准教授。



文学研究科
人間科学専攻
宗教学専攻分野

教授 鈴木 岩弓
Iwayumi Suzuki

1951年生まれ、東京都出身。東北大学大学院文学研究科博士前期課程修了、後期課程単位取得。専門は宗教学、宗教人類学、宗教民俗学。島根大学助教授、東北大学文学部助教授を経て、1997年より現職。

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/p-religion/top.html>

留学生支援・異文化間教育

留学生と東北大生の共修活動 教育と研究の循環で質を高める



末松教授の旅の思い出の写真や、母国に戻った留学生からの絵葉書。



東北大学のキャンパス国際化をテーマに、様々なイベントを企画・実施している。

国際交流センターは、主に海外からの留学生の教育支援と、東北大生を協定校に派遣する際の支援などを行っている。末松教授はセンターに赴任する以前からも、経済学部国際交流支援室で様々な教育機会を創出してきた。

現在、最も力を入れている活動の一つが、文系の短期留学プログラムの改善・拡大だ。末松教授は統括責任者として、留学生を受け入れた場合のメリットを各文系学部で説明し、拡充のための交渉を続けてきた。

末松教授は自らの留学体験を活かし、留学生に対してのきめ細やかなケアも行っている。学生や留学生支援団体と連携し、初来日の際に仙台駅まで迎えに行き寮に送り届けるところからはじまり、就職支援まで。外部資金を利用して、留学生本人やその家族の出産や子育ての支援にもあたっている。

留学生を支援する学生の組織もある。文系短期留学プログラム「IPLA」を支援する学生たちが立ち上げた「IPLANET」だ。短期留学生が東北大学に在籍する1

年間の間に、日本の学生と同じ体験をしてもらうのが狙い。様々な支援活動やイベントを開催し、学内に国際交流ネットワークを広げている。

東北大生の異文化教育も充実している。末松教授の専門は、異文化間教育。日本の大学では珍しいPBL (Problem-Based Learning) 型共修授業を実施している。8~9名のグループで、一つの課題について日本人学生と留学生が様々な議論を繰り返し、課題解決に取り組んでいく。部活体験会を企画してクラブと留学生の橋渡しをしたり、留学生が入りやすい飲食店マップを作成したり、日本を漫画で紹介したりと、その内容は多岐にわたる。末松教授は課題解決までの過程で学生の成長をサポートする。「留学生と日本人学生の共修は、今後の国際教育・グローバル人材育成の要となるでしょう。その教育効果を研究し、実践に反映させていくサイクルが必要です。学生たちには、できないと思うことをできるものに変えていこうと言っています」と末松教授は語る。



ソファが設置され、学生が相談しやすくリラックスして話ができるよう配慮された教授室には、しばしば学生が訪れている。



日本の文化を伝えるために、学生たちが留学生のために作成した小冊子。



留学生が参加できるクラブの案内「NO CLUB NO LIFE」。

大阪府出身。米国ニュージャージー州ラトガーズ大学経済学部卒業後、総合商社勤務。その後、インディアナ大学言語教育学科にて修士・博士号を取得。専門分野は留学生教育、国際教育、異文化間教育。東北大学大学院経済学研究科国際交流支援室の留学生担当講師、准教授を経て2013年より現職。

国際交流センター
教授 末松 和子
Kazuko Suematsu



<http://www.insc.tohoku.ac.jp/cms/index.cgi>